

特集

新たな暮らしの選択肢を目指して

～ぱれっとの家 いこっとの7年間を検証し、
今後の課題を考える②～

様々な人たちの想いと協力により誕生した「いこっと」。戸惑いながら日々成長する入居者の暮らしと現状が前号で語られました。特集最終号では、事業継続の上での課題をさらに検証し、今後の「いこっと」を考えます。

ぱれっとに新しい職員が入職する中、ぱれっとの重要な事業の一つ「いこっと」について、職員それぞれがどこまで認識しているだろうか？と運営委員から意見がありました。その問いかけをきっかけに、今回職員宿泊体験へとつながりました。現場で感じた「いこっと」の暮らしとは？

●ぱれっと職員による体験入居

1月24日(火)から1月28日(土)までの5日間、「いこっと」で体験入居をさせて頂きました。元々、3年間一人暮らしの経験をしたことがあったのですが、シェアハウスのような共同生活自体が初体験でしたし、5日間面識のない人達と共に過ごすという体験は小学校5年生時に経験した2週間キャンプ以来でした。そのため、初日は不安と緊張が入り混じりながら帰宅しましたがそんな心配はすぐに杞憂に終わり、日が経つにつれ自分でも驚くくらいリラックスして過ごしていました。というのも、いこっとの入居者の方達が、“ぱれっとの職員の松本さん”ではなく、“体験入居の松本さん”として接して下さったからだと考えています。仕事の一環として体験入居をさせて頂くということで、私も職員として「何かをしなくてはならない。」という思いに無意識に駆られていたのですが、入居者の方に「いこっとがどんなところかということを知って欲しいので、いつも通りに過ごして下さい。」と言って頂

きました。また、障がいのあるなしに関わらず入居者の方達にお風呂や共有物の使い方などを丁寧に教えて頂いたり、リビングでテレビを見ながら日々の取り留めもない話をしているうちに心身の緊張がほぐれ、気づけば滞在の最後の頃は障がいがある入居者の方のことを“障がいのある方”としてではなく、“同じ家に住む仲間”だと意識していました。

たったの5日間ではありましたが、個人がしっかりと自立した生活を大切にされていたことがとても印象深い思い出として残りました。排水溝のごみの片づけや食器洗い、朝食を摂った後のテーブル拭きなどもそれぞれがきちんとされていたことを身を以て実感したからだと思います。共有スペースであるリビングで朝夕顔を合わせた際の、何気ない挨拶や会話を交わす時間が思っていた以上に居心地良く、いこっとでの生活を経験したことがない方にも是非、体験して頂きたいと思いました。



【入居者の皆さんと(左端が筆者)】

(おかし屋ぱれっとスタッフ 松本亜沙子)

●現在の入居者の声

2016年8月末にいこつとに入居しました。入居の理由は、月1回の入居者ミーティングと、掃除やゴミ出し等を住民当番で行なう点に惹かれたことでした。私は以前、60人規模・30人規模のシェアハウスで生活しました。いずれも住民同士で家の中の問題を話し合う場はなく、掃除やゴミ出しは清掃業者に任せきり。そのため、ルールを守らない住民や掃除の出来等に対して、住民の間で愚痴や不満が出てきて、人間関係がぎくしゃくすることもありました。家の中の問題に関して、愚痴や見て見ぬふりではなく、住民同士で話し合い解決策を考えるシェア生活を送りたい。そう考えて、いこつとに入居しました。日頃身近に障がい者と関わる機会はなく、ボランティア活動等も未経験。最初は不安もありましたが、同じ家で暮らす者同士、時間をかけて良い関係を作っていこうと入居して、今もその思いは変わらず暮らしています。入居してよかったことは、月1回のミーティングがあることです。掃除やゴミ出し当番から、防災グッズ購入に至るまで、様々なことを話し合います。ここでみんなで生活に向き合うことで、共有できる時間は少なくとも「生活を共有する」実感が持てるような気がします。また、一緒に暮らす入居者の変化が見られるのが、とても面白いです。



【入居者ミーティング後の夕食会】

入居当初は自炊をしなかった人が、周りの影響で料理に興味を持ち、野菜炒めを作ってみる等、日々変化していく様子にとっても刺激を受けます。難しいなと思うことは、話し合いですね。何をどう伝えるか等、工夫が必要だと感じます。それは、障がいの有無を問わず、違う価値観や生活様式を持つ者同士の共同生活では、避けて通れない道であり、共同生活の醍醐味であるとも感じています。

(入居者 原田真里)

●入居者の親の声

ぱれつとつうしん「いこつとでの生活」を読んで一人感慨に浸り、同時にいこつとの皆さんに感謝と共に有難うございますと伝えたいです。

13年前を振り返ってみますと、息子との心のずれがあることに気づきました。それは、私達夫婦が本人に障がいがある事をわかっていなかったのです。つらかったでしょう。苦しかったでしょう。世の中の事を恨んだ時があったでしょう。私達夫婦のことも。

それからは「発達障害養成講習会」による相談会があればとにかく出かけていき勉強をしました。私達夫婦の接し方が違ってきただけで、様々な問いかけにもついてきてくれるようになりました。ハローワークにはよく行きました。そこで知った「パソコン委託訓練」240時間をクリア。その後障害者福祉会館に2年間通い、ハローワークから今の仕事を紹介していただき、世の中まんざら悪くはないんだと思っている息子を私は勝手に想像しています。

今は、息子は家に戻ってきて、用事が済むとサッサといこつとに帰ってしまいます。

(入居者家族 山口節子)

●まとめにかえて（課題の見つめ直し）

前回のぱれっとつうしんでは、様々な立場の方々からいこっとの成り立ち、それに対する思いや現状等を見てきました。こうした経緯や現状、見えてきた課題の見つめ直しにおける2つのポイントをお伝えして特集の締め括りとします。

最初のポイントはいこっとの事業において「①今までぱれっとが福祉の世界で培ってきた視点、②「住まいの視点」の2つを大切にしていけることです。

一般的な共同住宅の運営と異なることとして、いこっとなが障がいのある入居者の選択肢を広げる機会となること、時には課題に光を当てて共に向き合う必要性があることが考えられます。これらの点においては、ぱれっとがこれまで福祉の世界で培ってきた視点を大切にしていかなければなりません。

例えば、世の中の様々な場所において人間関係が希薄になってきており、摩擦や衝突が多くなっています。これは、いこっとなにおいても例外ではありません。入居者内でトラブルが起きた場合、当事者同士で話し合いをし、納得がいくまで話をすることが必要です。しかし、時には入居者内では解決できない場合もあります。場合により、ぱれっとがフォローをしていくことも考えられます。その際に課題に向き合うこと、決断をしていくこと、決断後も責任を持っていくことといったこれまでにぱれっとが培ってきた視点を踏まえ事業運営をしていく必要があります。

一方で、「住まい」の視点を持つていく必要もあります。これまでぱれっとは「住まい」のセクションとして、主にグループホーム運営を行なってきました。そこ

では法律や制度の枠内にあるものが中心でした。いこっとの事業を開始したことで、NPO コレクティブハウジング社を始めとした福祉がメインテーマではない「住まい」をメインテーマとした団体・建築関係者・シェアハウス等の運営者との関わりなど、新しいつながりができました。新しい住まい方を社会に投げかけるにあたってはこの視点も重要です。

次のポイントは広報の必要性と意味、方法の整理です。いこっとなの広報については「①ぱれっとが考える新しい生活のあり方・事業を社会に広げてくための広報、②障がいのあるなしに関わらず入居希望者に関心を持ってもらい入居につなげるための広報」といった2種類の広報があります。前者に対しては、WEB掲載内容の見直し・検討、講演先やイベントでの情報提供、取材・見学対応の受け入れといった活動を行なっています。後者に関しては、これまでは口コミを中心に情報を提供する形がメインとなっていました。入居者募集に関しては定期的に情報を発信すること、「部屋を探している人」に情報が届く仕組みを模索していくことが必要です。

現在、これまで考えてきたことに対していこっとなの事業として行なうべきこと、「住まい」のセクションとしてぱれっと内での定義付けを確認すべく議論を進めています。今後いこっとなの事業について幅広い応援をいただければと思います。
(いこっとなサポートの会/

認定NPO法人ぱれっと理事 田口雄一)

【入居者募集】『私も暮らしてみたい!』
と思った方は、19 ページの「入居者募集」をご覧ください。お待ちしております